



馬耳東風

以前、本欄で多くの人々、特に若い世代の人々が様々な面で物事を考えることを放棄したと思えるような行動が気になると書いたことがあるが、最近ではその傾向が益々強くなってきたように感じられる。先般、通勤時間帯を過ぎて電車に乗ったが、乗客の70%以上の人々がスマホなどの画面を見ているのに驚いた。今の若者事情、1週間に一度も読書をしないが1日に何時間も画面を見ている学生が多いと聞く。その内容は何であれ、スマホ情報が彼らの大きな行動指針になっていることは確からしい。責任の所在もわからない多くの情報に過度に依存するのは、すでに彼らがロボット化している以外の何物でもなく、人から指示されるのを嫌う若者気質として理解できない。

以前、ロボットは人に代わって単純な作業を行う機械というイメージが強かったが、最近のロボットは複雑な作業を人よりも正確に、素早く処理する能力があるという。自動車組み立て工場でのロボットの動き等を見るとその感を強くする。「ロボット」という言葉は1920年にSF作家が用いた造語であり、チェコ語で「隷属」を意味する「robota」に由来するという。ロボットが人に「隷属」するならば描くイメージとぴったり合うが、最近ではロボットの発達が早く、人間の成長を凌駕しそうな勢いである。機器の自動化が発展する段階では人はその機器を操作するために非常に高度な知識・技術が要求されたが、それが更に進歩しほぼ完全に自動化された機器においては人の高度な知識は必要なくなる。従来、人間が頭脳労働として行っていたことをロボットが取って代わる時代になりつつあるようだ。しかし、現在のと

ころロボットはどんなに複雑な内容であれ人が対処法を予め指示してあるものに従った行動以外のものはできないし、知識、経験に基づいて新しく発想することも出来ない。従って、すべてのプログラムについて言えることであるが、ソフトウェアの開発意図、即ち開発者の動機、教養、倫理的基盤などを理解して利用することが利用者の優位性を保つ上で不可欠であろう。過去20年、日本の製造業は経費削減という理由のみで海外、特に中国に製造拠点を移したが、結果として製造技術のみならず開発能力まで低下するという苦い経験をした。さらに今後、膨大な経費をかけてあらゆる社会機構がコンピュータシステムに組み込まれて行くであろう。しかし、一方で多くの失業者を生み、システムの安全性を確保するためにさらに膨大な人・経費を投入して行かざるを得ない現状を見ると、果たして経費対効果の観点からどれだけのメリットがあるのか疑わしくなる。コンピュータシステムが大規模になればなるほど自分に関するデータが何によって制御され、何に利用されているのか知ることは不可能になる。考えて見れば恐ろしいことである。

今後もあらゆる分野でコンピュータシステム化の流れは止めることは出来ないであろうが、考えることも技術に熟練することも必要なくなれば、その先には我々の脳力も技術力も下降線をたどり、廃用性退化してゆく道以外に道はないということになりそうだ。「ネット・バカ」の著者ニコラス・G・カーは、「重要なのはロボット化がいかに進展しようが、人の考える能力を必要とせず衰退させるようなものは断固として拒絶すべきある」という。人々が幸福な人生を送れる平和な社会、それはロボットを隷属させる社会以外には無いようだ。

(青)